

守り人の願いこもりて桜咲
白鷹の山菜うまし花も愛で
さくら旅きずな深めし白鷹へ
老木や生命けずりて花ひらく
山脈に古典桜の散る里か
八百年のしらたか桜おしむちり
山おくの思いをのこす山さくら
残雪の山なみはるか花めぐり
しらたかの歴史をつなぐくら守
古典桜蔵高院に祈り無事帰宅
ほゝそめて二人よりそうサクランボ
置賜や古桜色香あり
白鷹のちりゆく花のさくらかな
しらたかの水面に映る萌黄色
白鷹の村を千年見守る薬師櫻かな
新緑の小路歩きつ水芭蕉
山里に笑顔ほころぶ桜かな
白鷹の古典桜を写る最上川
桜心旧き想い偲んでくれたか現代人
残雪ののこれる山々みどりかな
残雪を空に散りばめ朝日岳
白鷹と共に生きる桜なり
散り初むる古典桜や最上川
雪解けや大河となりて最上川
千年の桜かほりし白鷹に觀光客の笑顔はじける
白鷹の古木桜に我思う遠くなつかし淡恋桜
千年の古木桜は守られて春天に生える色鮮やかに
白鷹町への初めてのツアー
着けば皆さんの暖かい心とおもてなし感謝の念山程
朝日連峰に抱かれて古典桜のたくましくやさしい花々達
幾代にも耐えたる幹の尊さよ守りの翁のりんとして立つ
古の人が伝えし江戸ヒガン白鷹の地で千歳を刻む
「エドヒガン」白鷹の地に根を下ろし仏の心偲ばるゝかな
花に酔いお酒に酔いしれ訪れし即身仏は喝の一言

石田弥寿雄 内田東志佳 国友 範子 近藤 則子 齋藤 純子 白鳥 正代 荻野 峰子 藤井美保子 藤井美保子 舟山 忠 矢藤 重雄 石原 和憲 中島喜世子 河野 誠一 熊川 浩 黒瀬 邦子 斎藤 純子 杉山 光雄 高梨 絃一 千葉 忠雄 塚本 勝代 内藤 勲 原田 絹代 原田 博行

池亀 かよ 小川三佐子 小川三佐子 小侯 英子 小侯 英子 塚本 勝代 齋藤 健司 齋藤 純子 城島 静也

4月27日、しらたか古典桜ツアーで白鷹町を訪問いただきました神奈川県海老名市の皆様より旅の思い出を「川柳・俳句・短歌」としてお寄せいただきました。

ありがとうございました。

白鷹古典桜訪問団による

「川柳」「俳句」「短歌」集

(※ 順不動)

町報川柳 「色」

春になり色とりどりの花が咲く
宵闇に色香ただよう花小路
色よりも味で勝負だ我が野菜
虹色に世界の架け橋オリンピック
春一番黄色がさえる福寿草
色々な生命育む今が好き
色気より食い気になぜかホツとする
大自然今年はどうな色を塗る
戦争の昔語りも色あせる
夕暮れがオレンジ色の日暮れかな
風に吹かれ黄色水仙ハーモニー
あの頃の色つきレターが懐かしい
西山の四季の色彩美しき
十色超えイロイロあるよ人だもの
色紙で年の数だけツルを折る
人生を色でたとえるすみれいろ
七色のにじのかけ橋雨上り
白無垢に漂う色彩湧き出づる
紅色ののぼりの旗が風にゆれ
飲み過ぎて鏡にうつる真赤な顔色
淡い色可憐な花にいやされる
花の下車座徐に櫻色
白山を緑に染めて轉りを
髪の色染めてはみても黻教え
初デート薄紅色に頬染める
思い出が生きて色づく無人駅
色退せし写真の母いと恋し
まだ女色香氣にする敬老会
振り向けば薄紅色の春霞
油絵で色をかさねて自信作
チウリップ色あざやかに咲き出した
故郷の景色なつかし夢で見る
七色の大きな虹が美しい
色を変え西に紫陽花稟と咲き

長井市 安部ありな
高岡 安部 健一
山口 石川與次衛門
荒砥甲 五十公野かをる
大瀬 五十公野春己
世田谷 糸 マサ
鮎貝 植木 英夫
浅立 梅津美千子
滝野 海老名きち
横須賀 大滝 健次郎
荒砥乙 木口 とよ
菖蒲 小関 弘
山口 児玉 保子
つくば 斎藤 靖夫
畔藤 菅原 敦子
鮎貝 神保 玲子
箕和田 鈴木 トミ
荒砥甲 鈴木美貴子
鮎貝 関口 つや
十王 平 恒人
高玉 高橋 朝子
荒砥乙 土谷 灯一
箕和田 土屋 平敏
箕和田 土屋 敏子
高玉 橋本つねこ
箕和田 樋口 昭吉
鮎貝 樋口 敬子
荒砥乙 樋口 敬子
荒砥乙 保科 努
町田市 保高 悦子
十王 松田 久一
ふじみ野 村上 桂造
十王 守谷 勝助
鮎貝 横沢 直太
山口 渡部喜美子

次回「青」六月二十五日まで。「水」七月二十五日まで。
白鷹町大字荒砥甲八三三番地 白鷹町役場企画政策課情報係 宛